

#### 第四回 柴田南雄音楽評論賞選評

三浦雅士

柴田南雄音楽評論賞の第四回は、応募作品がこれまでになく充実していて、嬉しい驚きを感じた。みな日本語として読むことができ、言おうとしていることもよく分かった。したがって、鐵百合奈さんと堀内彩虹さんの二人が選ばれたことも当然だった。二人の評論がもっとも論旨が明瞭で、日本語としても破綻が少なかったからである。可能性を感じさせる二人が選ばれて良かったと思う。お祝い申し上げたい。

だが、いざ、選評を書くにいたって、困惑している。論旨明瞭なだけに、その論旨あるいは方法に関して、不満あるいは異論を覚えなくてもないからである。

音楽評論は音楽ではなく文学である。文芸批評を職業としている私が選考委員の末席を汚している理由であると考える。選ばれた二人の演奏会評、音楽時評は、音楽ではなく文学であるという要件を満たしている。音楽について書くことは難しいが、その難しさを十分に意識したうえで、さらに困難なことに取り組もうとしていることは、とりわけ演奏会評における音や流儀の描写の工夫によく示されている。問題がないわけではないが、方向性において間違っていないと思わせる。

鐵百合奈の音楽時評『ソナタ形式』からの解放」は、音楽学者、音楽批評家である他の選考委員が強く推した。文芸批評家としては、時評というよりは論文であり、一般読者に読んでもらうには楽譜の引用が多すぎて、疑問を感じないでもなかった。第二主題という呼称と副主題という呼称の違いへの注目に感心しなかったわけではない。以前知り合いの文科省の役人が、いわゆる旧帝大の副学長に就任していたことに驚いて、確認してみると副学長は十人ほどいるのだということが分かって、いつそう驚いたことがある。ベートーヴェンのピアノ協奏曲第四番を聞きながら『ソナタ形式』からの解放」を読んでいて、しきりにそのときのことを思い出した。確かに、第二学長ではなく、副学長である必要があるのだ。

それにしても第二主題と副主題の問題がいままで問題にされてこなかったとすれば、それはいわゆるこれまでの音楽学者に問題があったのではないかという疑問を払拭しきれない。音楽学者はいったい何をやってきたのだ？ さらに大きい疑問としては、音楽の国ドイツという神話が出来てからたかだか二百年、ドイツ語と英語の疎隔が生み出した問題が少なくはないということも、ほとんど問題になっていないと思われる。ヴァグナーがメンデルスゾーンを抹殺し、シューマンがシューベルトを国民神話にしていった過程で払拭されたのは、メンデルスゾーンの英国趣味でもあったと私は思う。ヘンデルやハイドンにとって英国はもっと身近であった。音楽におけるドイツ語文献第一主義なんてものは存在しなかったのである。用語自体がイタリア語なのだから。

対するに、堀内彩虹の「音楽の共有（不）可能性」は、いわゆる文芸批評にいつそう

近づいている。あるいは、音楽的「知」などという語の用い方に、ポストモダン風な流儀が感じられて、人によっては違和感を覚えるかもしれないが、それが論旨を不明瞭にするというようにはなっていない。だが、また、矛盾をも際立たせる。音楽の共有可能性も共有不可能性も、身体的「知」の問題に収斂する。その昔、テレビが普及しはじめていた一九六〇年代、その年流行した歌謡曲は全国民の身体に共有されていた。街を歩いていると聞こえてきてしまうからである。その体験が年末の紅白歌合戦を支えていた。いまではそんなことはない。ここには、世代の問題、出身地の問題その他、音楽社会学が食指を伸ばしたくなるような主題が詰まっている。

だが、身体的「知」は最終的には個別性に収斂せざるをえない。人と人は、結局は、分かり合えないのである。この問題を堀内はスナツパーの水中オペラを通して論じている。水の体験は個人によって違う。なかには水に溺れて死にかかった人間もいるだろう。聞こえ方も違ってくる。堀内はそう考える。

むろん、これは普遍的な問題である。もともと、音楽は集団の心を一つにするものとして採用された。戦闘舞踊、戦闘音楽が端的な例だ。音楽は身体の共有可能性の徴なのであり、だからこそ為政者は音楽空間としての劇場に政治的に過敏に反応したのである。音楽の共有可能性は身体の自然なのだ。共有不可能性など、近代の自己意識の問題の系にすぎない、ということになる。

さらに大きな問題は、音楽は本質的に言語であり、言語は本質的に視覚を基盤にしているということである。断っておくが、言語はコミュニケーションの手段などではない。自分に対する関係の対象化であって、それは音楽にしても同じだ。言語が聴覚ではなく視覚を基盤にしているということは、音楽もじつは聴覚ではなく視覚を基盤にしているということである。最近の言語学を敷衍すればそうなるが、これで音楽学もずいぶん違ってくるのではないかと私は考えている。前提が違ってくるのだ。

堀内彩虹は論文を、イヤホーンを当てて街を歩く人だらけになった現在の描写から始めているが、私はそこに、いわゆるクラシック音楽がジャズと同じような一ジャンルに矮小化されてしまうのではないかと不安が漂っていると思う。

杞憂ではない。ジャズは一世を風靡したが、いまや違う。街のCD店を覗くだけで分かる。常磐津、清元と同じようなものである。クラシック音楽もまた同じようなことになるのではないか。清元の誰々の音の外し方はかくかくしかじかの理由によって見事であったという江戸時代の舞台評と同じようなものに、現在の音楽批評家、音楽学者の論文もまた受け取られるようになるのではないかという恐れは払拭できない。

クラシック音楽は普遍的か？ 最終的にはそれが問われているように思われる。